

『百物語評判』の意義

太刀川 清

江戸時代の怪談の流行を裏づけるものに、辨惑物ともいうべき、これが妄を辨じ、世人の惑を解こうとする一群の作品がある。たとえ『怪談辨妄録』(寛政十二年刊)、『古今辨惑実物語』(宝暦元年刊)といった類のものであるが、その種の先蹤を貞享三年刊行の『百物語評判』にもとめようとするものがある。^(註1)

いうところ必ずしも誤りはないにしても、『百物語評判』にはいわれるほどの辨惑の意もなく、だからといって世間に流行する怪談に対して横に出ようとす意図もなきものである。後世になって怪異の現実的解釈から、その評判の意義が「辨惑」という語に通じるところがあつても、仮名草子のこの時代にあつては、世間の風説にそれほどまで辨惑の必要性もなかったのである。『百物語評判』はあくまでも世間で噂する怪説異聞を評判することであり、怪異の実態を説明するという啓蒙精神のなすところである。

さて、山岡元隣(寛永八年—寛文十二年)が当時代の怪異の実態を明かにするに、百物語の形態を採つたのはきわめて適切なものであつた。巷に百物語怪談会が流行し、『諸国百物語』(延宝五年刊)をはじめとする怪談会になむ怪異小説が出廻る中で、百物語にことよせて怪異の説明を試みることは、さしあつて人々の怪異の関心が奈辺にあつたかを確かめることが出来たばかりでなく通俗的な意味でこれにまさる啓蒙方法はなかつたのである。たとえば元隣の雷の説明を聞いてその場の人々が、「此の説を承りて、少し怖るゝ心止み候ひぬ(巻一の一)と安堵するのはその好例である。

百物語を名告るからには例によって怪談会の記述がある。

過ぎにし頃六条辺に、而愠斎先生とて和漢の達者、儒仏兼学の老人あり、所謂天地山川動植古往今來の事に会通せずといふことなし。或夕暮の雨さへ降り、

物しめやかなる折ふし、先生を訪らひけるにはや四辺の好人二三人集まりて、世の不思議に恐ろしき事の百物語を始めければ、先生其の一つ一つに唐の倭の例を引き評判し給ふ。其の道理細やかにして、事実には洩るる事なし。未だ百にも満たざれども、夜も更けければ又の夜と云ひて止みぬ。

『百物語評判』の序文の前半である。而愠斎先生はいうまでもなく元隣であり、いわゆる通りの学殖豊かな当時代を代表する知識人であつた。そしてこの書を『百物語評判』と命名することを指示したのも元隣その人であつたことは、彼のこの書に寄せる期待の大きさを思わせるのである。

だが、この書の刊行を企てた者は、その元隣ではなく後人であつた。序文はつづいて、

僕も其の座に列なりて、聞き覚えし事を書きつけ。頃日古反堆の中より取り出して、かいやり捨つべかりしを、先生の辨論なれば、人の求めに随ひて梓に彫め侍る。若し理の背けるあらば、やつがれが記し誤れるにて、先生の罪にあらず、見る人許し給へと云ふ。

この書の刊行は貞享三年六月であつた。僕とは誰であつたか。元隣宅のこの百物語に参加した一人であるが不明である。近代日本文学大系「怪異小説集」の解題者(笹川種郎氏)は、版元の京都堀川通西吉水町梶川常政、榎木町通福島町杉原正範の二人を、いずれも山岡元隣の門人であるというが、そうすればそのうちの一人であつたか。しかしその確証はない。とにかく元隣没後十四年目の刊行であつた。その間のいきさつについては跋文によると、元隣が編纂半ばにして病没したので、その志を継いで、長子某が補削をしたものであつたという。「誠には而愠斎の外に、和漢の達者ありて評判を加へながら、名かくし侍るものやうに思はれ候はいかに」という周田の問いに対して「素問」や『莊子』の場合同様に後人の加筆のあることを認めて、

而愠斎の長子何がし博識洽聞にて、父の才徳にも越えたり。過ぎつる頃此の巻を手に示して云く、乃ち翁此の書を編みなんとて、中半にして身まかりき。

いざとよ父の志をなしてんやと云ひければ、予聞いて、あな賢よくも知らせ給ひし物かなとて疎きを補ひ、滋きを除き、日あらで此のふみなりぬ。

この跋文を記すものもまた例の僕と名のる者である。いうところの長子某は元隣の子元恕であった。もっとも『誹家大系図』によると元恕は「山岡氏、元隣従弟、名字詳ナラズ、京師ノ住、家書統俳諧仕様アリ、寛文延宝中ノ人」とあってその人ではないらしいが『諸国独吟集』(寛文十二年)の季吟の序、元恕の跋によって、元恕が元隣の子息であることは明かである。しかしこの元恕の加筆部分がどこであるか明かでない。それは「評判のうちに、近頃の例をも引き用いらぬる事侍れば、故事遅れ評判さきだち、何とやらんついで物ぐるほし」と跋文が指摘するところであるが、思うに巻五「痘の神疫病の神付齋齋乙の字の事」はその一つではなかったか。「近頃家々に齋齋乙といふ字を張りし」以下は『群談採余』の故事をひくところであるが、この齋齋乙の守り札が天和貞享のころのことである確証が俟たれる。

元隣の評判に先立って『百物語評判』の成立について若干の考証を試みなければならなかったが、それが十四年を経た後日に刊行されたということには、やはり天和貞享時代の怪異小説の流行を背景にしたものであった。すなわち天和三年には『新御伽婢子』が、貞享二年には『西鶴諸国はなし』と『宗祇諸国物語』の出版があり、『百物語評判』刊行の貞享三年には『浅草拾遺物語』が、さらに翌四年には『御伽比丘尼』と『奇異雑談集』が出るのである。殊に『奇異雑談集』など古く行われた写本の怪談集がここで改めて版行されるなど怪談の流行の徴をみるこゝが出来るのである。

こうした怪談の流行は怪異の数をいやがうえにも増す。それがまた怪異に対する議論を誘発して人々の関心を呼ぶところとなるが、浮世草子時代の現実肯定の精神は怪説をそのまま肯定するわけにはいかなくなっていたのである。百物語を素直に享受出来なくなったのもそうならば、西鶴が「人は化物世にないものはなし」(『西鶴諸国はなし』序)と怪異を揶揄するのもその現われで、そうした時代なればこそ百物語評判で「其の珍らしきに付て、或は化物と名付けて不思議と云へり。世界に不思議なし、世界皆不思議なり」(巻四、「西寺町墓の燃えし事」と喝破したり、巻五の「而温斎化物ものかたりの事」で「人は化物」の具体的な物語をするなどしていた元隣の物言いが、怪談の流行を素直にうけとれなかった浮世草子時代の知識人の物言いとしていまここに蘇つて来たのである。

『百物語評判』には、そうした怪談流行に対する物言いが啓蒙精神と裏腹に歴然としていたのであって、これを「辨惑」と解せば解せないこともないが、そう解したので『選択古書解題』であった。

二

『百物語評判』のもとづく百物語は、互に怪事を語りあういわゆる百物語怪談会ではない。怪事のひとつひとつに元隣が「唐や倭の例を引き評判」する変則的なものであるが、要はその中で見せた元隣の学殖が問題であり、それが当代知識人の一人のものであるから興味深い。

元隣の引証した和漢の怪事をあげながら、評判の結論を要約すると次のようである。

怪事	評判	引証事項
巻一 1 ○鎌鼬	山谷の鬼魅のなす業なるべし。	「博物志」・「搜神記」・「輟耕錄」(南蛮紀行)
2 ○轆轤首	多く南蛮の中に侍るべし。	「芥川の鬼」(黒塚の鬼)
3 ○鬼	陽の所為を神と言ひ、陰のなす所を鬼という。愚痴倭人のひがみ曲れる魂を鬼といふ。	
4 ○釣瓶卸	大木の精にして、即ち木の生火の理なり。	
5 ○こだま	生類にあらず。空谷響の心なるべし。草木の精をこだまと申すべし。	「搜神記」・「開天遺事」・「狄仁傑」・「幽冥録」
6 ○見越入道	愚かなる人に臆病風の吹き添えて、悄然と歩ける夜道に氣の前より生ずる処の影法師なり。	「莊子」
7 ○犬神	待遇すべき人の我をもてなさぬを腹立て心にかけて詞に云ひ出す処是則ち犬神なり。	(蠱毒)
8 ○神鳴	雷は陰陽相迫る声なり。	「周易」・「國史補」 「性理大全」・「医書」

卷一

○狐

狐に変化する術あり。

〔樂光〕〔菅丞相〕

〔宋史〕〔欽若〕〔信田妻〕〔百丈禪師〕

○狸

狐の如く奇妙なる事はなけれども、化くる事はをさをさ劣らず。

〔皇明通紀〕〔鄭智〕〔古今著聞集〕〔芥藤左衛門助康〕

有馬山の地獄
谷・座頭石

硫黄の氣によりて其の穴へ入りたる虫のたぐひ死するなるべし。座頭石は是れたまたま其の石の人形に似たるものをもつて名づけるべし。

〔望唐土の地理の書〕〔望夫石〕

箱根の地獄

人の氣の前に見る幻容なるべし。

〔一統史〕・〔湖広総志〕・〔文公小学〕・〔司馬溫公〕・〔文中記〕・〔本草綱目〕

○産女

此の物なきにあらじ。生まるところの氣産婦なれば鳥となりても其のわざをなせる。

〔左伝〕〔彭生〕〔平将門〕

○幽霊

氣の滞り或は形をなし、又声を生ずる物を幽霊といふ。

〔李景〕〔李赤伝〕〔李赤〕〔智通〕

○垢紙

塵垢の氣の積れる所より化生し出づるものなり。不浄の氣の積れる所の靈たるべし。

〔左伝〕・〔袖中抄〕・〔實之〕・〔古今集〕の序

卷三

○松童子

年久しきものなる故童子になりける。

〔史記天官書〕・〔天文史〕・〔古今著聞集〕

○道陸神

用はるべき子孫もなき亡者の妄念によりて、天地の間に流転せる亡靈なり。深山幽谷に住む魘魅の類なり。

〔史記天官書〕・〔天文史〕・〔古今著聞集〕

○天狗

世界の錢の精、空中にたなびく物なりけらし。何にても其物集まれば其精

〔円鉛総録〕〔省陌〕

○錢神

貧乏神

必ず生ず。

窮鬼といつて天運による。

〔韓退之〕〔汪文正公〕

○山姥

深山幽谷の鬼魅の精たるべし。其のあつまる所にては鬼魅の精靈あるまじきにあらず。

〔一休〕

○油盗人

人の怨靈と同様油盗人もあるまじきにあらず。光る物は青鷺。

〔古今著聞集〕〔觀教法印〕

○描また

猫魔の略で、猫の経あがりたる名なり。陰獸にして虎と類せり

〔吳隱之〕

卷四

撰津稻野の小笹

○河太郎

愚かなる心故、自ら其詞にひかされて血あがり氣狂ふ事あるべし。

〔太平広記〕〔丁初集〕

○野奈

颯の事なり。

〔本草綱目〕〔万葉集〕〔賈誼〕

○農の怪

農は化鳥の最上にして其の徳さがなきものなり。深山幽谷に住める化鳥なり。いかさまにも妖怪を為す物ならし。

〔太平記〕〔源三位頼政〕〔徒然草〕

○鬼門

東北の方を忌むべき義覚束なし。若し方向を以て云はば乾の方は忌みぬべし。

〔神異経〕〔武王〕

○雪女

物多く積れば、其の中に生類を生じ侍るなり。雪も陰女も陰なればなるべし。

〔夜見え陰火なればなるべし。〕

○墓の火

9	○舟幽霊 ○姥が火	水中の陰火として一通り有る物なり。 溺れ死せし人の魂いかにも火と見え形も現はれ侍るべし。	(仁光坊)
10	雨師・風伯	地の陰気は昇りて雲となり、陽気は降りて雨となり、元より陰陽のなす所にして外に可る鬼神も有るべきにあらず。	「帝王世紀」(湯王)・ 「貞観政要」(太宗)
11	黄石公	石の化けたるにあらず黄石公と申せし人。	(黄石公)
卷五 1	痘の神 疫病の神	共にあるべし。其の根ざしは胎毒なれども、其の誘ふ物は時の気なり。その集まれる処則を鬼神あり。	「医書」・「群談採余」
2	蜘蛛の怪	此事あるべし。蜘蛛は小さき虫なれども智の怖しき物なり。	(王守乙)
3	殺生の報い	殺生を好めるものは、天地の心元物を生ずる事を好み給ふに背けば、何ぞ報いもなからざらん。	(梁の武帝)「古今著聞集」
4	龍宮・河伯	山神水神龍王の類何れも有るべし。其のさま人間のやうに云ひ、住所も宮室のやうに作り為せるはひが事なり。	(倭藤大)「朱子語類」(張横渠)・「莊子」の寓言・「酉陽雜俎」
5	仙術・幻術	仙道にても幻術にてもさまざまよく得たる者あり。人を欺く時は必ず害にあふ。畢竟事実にあらず	(除福)「二程全書」
6	夢物語	人の寝入りたる時は五臟	

六腑の可る処々何れも其「異聞録」の能止むといへど、本心の主人は寝入らず、故に思ふ処の事あれば、起きたる後思ひ出して、是を夢といふなり。

とりあげた怪事を見て当代の人々の関心がどのあたりにあつたかを知ることが出来る。そしてそれらはまた怪談会や怪異小説を賑して来た数々の怪事であつたであろうが、元隣は決して従来の怪異小説に見られる理論を無視するものではなかつた。採るべきものは採つていたのである。巻一の「鎌鼬」が「都方の人または名字ある侍に、此の疵あうたる者なきは、邪氣の正氣に勝たざる理なべし」というのは『伽婢子』巻十の「鎌鼬」で「それも名字正しき侍には当らず、ただ俗姓卑しき者は、仮令富貴なるもこれにあてらると云ふ」というところに抛り、巻二の「産女の事」で「先づうぶめと申すは、唐土にも姑獲鳥又は夜行遊女などと云へり」というところから『本草綱目』や『女中記』の記事をもつて説明するのは『奇異雜談』下の「産女の由来の事」そのままである。また巻四の「雪女」で「物多く積れば必ず其の中に生類を生じ侍るなり」というのは、「夫れ雪の精霊、俗に雪女といふものなるべし。かかる大雪の年は稀に現はる」というのは元隣没後のものであるが『宗祇諸国物語』(貞享二年刊)巻五の「化女苦し躑夜の雪」と同趣の説明である。

そうした元隣の評判であるから、その記述によつて、その怪事がなお一層確かなものとして後世に是認されていくことは、この評判がそのまま怪異小説の素材として採られ、その作者の幽霊論や鬼神論となつていふことによつても明かであり、さらには安永五年に出た鳥山石燕の『百鬼夜行』の怪異図録までが『百物語評判』の記述をもとにしていたことでも分明である。

三

『百鬼夜行』

青鷺火

青鷺の年を経しは夜飛るときはかならず其羽ひかるもの也。目の光に映じ翳とがりてすさまじきと也。

舟幽霊

西国または北国にても海上の風はげしく浪たかきときは波の上に人のかたちのおほくあらはれ底なき柄杓にて水を汲事あり。これを舟幽霊といふ。これはとわたる舟の楫をたえてゆくえもしらぬ魂魄の残りしなるべし。

鵲

鵲は深山にすめる化鳥なり。源三位頼政頭は猿足手は虎尾はくちなはのごとき異物を射おとせしになく声の鵲に似たればとてぬえと名づけしならん。

津以真天

広有いつまでくと鳴く怪鳥を射し事太平記に委し。

野衾

野衾は鼯の事なり。形蝙蝠に以て毛生ひて翅も即肉なり。四の足あれども短く爪長くして木の実をも喰ひ又は火焰をもくへり。

彭候

千歳の木には精あり。状黒狗のごとし。尾なし。面人に似たり。又山彦とは別なり。

『百物語評判』

青鷺の年を経しは、夜飛ぶときは必ず其の羽光り候故、目の光と相応じ、啄尖りてすさまじく見ゆること度々なり
(巻三―七・青鷺の事)

西国又は北国にても、海上の風荒く浪はげしき折からは、必ず波のうへに火の見え、又は人形などの現はれはべるをば、舟幽霊と申しならはせり。舟をさどもの云へるは、とわたる船、破損せし時、海中に弱れし人の魂魄の残りしなり。
(巻四―九・舟幽霊)

鵲と云ふ物は深山幽谷に住める化鳥なり。源三位頼政、足手は虎の如き獣の飛び来りしを射て、後また賊の鵲を射し事平家物語に見えたり。
(巻四―五・鵲の事)

広有が怪鳥を射し事太平記にあり
(巻四―五・鵲の事)

野衾はあながち化生の物にあらず、鼯の事なり。……………其の状蝙蝠に似て、毛生ひて翅も即ち肉なり。四つの足あれども短く、爪長くして木の実をも喰らひ、又火焰をも喰へり。
(巻四―三・野衾の事)

唐にても彭候と云ふ獣は千歳を経し木の中にありて状狗の如しと云へり。
(巻一―五・彭候と云ふ獣)

『百鬼夜行』

『百鬼夜行』の正篇に於いて怪事の説明の記述があったなら、さらに多くの関わりを見るのであろうが、続篇からだけでも、石燕の『百鬼夜行』が『百物語評判』にも拠っていたことが判明する。そしてこのことは『百物語評判』いかに巷間に通行する怪異の理論的根拠となっていたかを裏付けるものである。それほどのものであったから『百物語評判』も貞享三年の初版につづいて、初版の堀川杉原板の刊記から杉原の名を削った堀川単独版、さらには宝暦三年の安井嘉兵衛版、また元禄九年の『書籍目録』には井筒屋平左衛門版が記載されているなど、なかなか人気があったことがわかるが、その人気の理由は通行の怪異に対して理論的根拠を与えた元隣の評判のためであったことはいまでもない。

四

元隣は怪異に対する理論はどのようなものであったか。彼の怪異観ともいうべきものは巻四の「西寺町墓の燃えし事」で、陰火の説明のあと「されども鬼神幽異の道理なれば、人悉く其の理を辨ふるに及ばず、其の珍らしきに付て、或は化物と名付け不思議と云へり。世界に不思議なし、世界皆不思議なり」と評しているところであって、元隣は決して怪異の存在を否定しているわけではない。その客観的存在として認めた怪異をここで理論的に説明しようとするわけであるが、その中には、硫黄の気をもって説明した有馬山の地獄谷の場合(巻二「有馬山地獄谷座頭谷の事」)のように一応の科学的説明もないわけではないが、多くは「凡そ生きたし生ける者、何れも陰陽の二気にもるゝ者なし」(巻一「鬼と云ふに様々説ある事」ということで陰陽五行をもつての説明である。たとえは「陽の所為を神と云ひ、陰のなす所を鬼といふ。(巻一「鬼と云ふに様々の事」)

天地の間一色も陰陽五行の理にもるゝ事なし……………其の火の中にて陰火陽火の別ちあり。陽火は物を焼けども、陰火は物を焼くことなし。(巻一「西の岡の釣瓶御并陰火陽火の事」)
雷は陰陽相迫る声なり。……………元より陰陽は相剋するなれば、陽は動いて陰を出さんとす。かくてぞ天地に響き山谷をも動かせり。陰陽等しき時は落つるに及ばず。陽の氣、陰に勝つ時は、其のあまる処或は中空にさかり、または地に下りて必ず積悪の家に落ちて悪人を災せり。(巻二「神鳴付雷并雷墨の事」)
是れ純陰の方にて、陽氣の將に絶えんとする処、万物の既に死する地にて、尤も不吉の方角なり。(巻四「鬼門」)
雪は純陰の物なれば、老陰の数六なる故必ず六出あり。……………扱雨露の結ば

ほりて白くなる理は、凡そ世界の物の固まる事、皆五行に配当して金氣の司る処なり。(巻四「雪女の事付雪の説」)

地の陰氣は昇りて雲となり、陽氣は降りて雨となれば、元より陰陽のなす所に於て、外に司る鬼神も有るべきにあらず。風は天地の埃氣と云うて、陰陽の氣の動き発する所にて、形有る者にあらず。(巻四「雨師風伯の事」)

物の生成を陰陽の交錯によるという理論の根拠は宋・程伊川の「理氣二元論」の立場を通じる。(巻五「仙術・幻術」の説明では『二程全書』をひく)。その陰陽は氣であり、氣は形而下であり、氣は万物の形をなす質料であるという理論はここでは「天地の間に生まる物は、みな氣より起れり氣のどこどこほるによつて形を生ず。」(巻二「うぶめの事付幽霊の事」という説明となる。また、

其の氣の滞りて、或は形をなし又声を生ずる物を幽霊と云ふ。(巻二「幽霊の事」)

垢祇も其の塵垢の氣の積れる所より化生し生づるものなり。(巻二「垢祇の事」)として、さらに「何にても其物集まれば、其の精必ず生ず」(巻三「銭神の事」と超現実的存在の説明となるのである。

山姥といふは、深山幽谷の鬼魅の精たるべし。此の世界あれば此の人あり、此の水あれば此の魚生ず。其の氣のあつまる所にては、魂魅の精靈あるまじきにあらず。(巻三「山姥の事」)

錢も人爲にいづる物なれども、其の集まるに及んで其の精なきにしもあらず。(巻三「銭神の事」)

物多く積れば、必ず其の中に生類を生じ侍るなり。水深ければ魚生し、林茂ければ鳥を生ずるが如し。されば越路の雪などには、此物出でんもはかり難し。(巻四「雪女の事」)

以上が元隣の怪奇の説明であるがそれは概ね儒説にもとづくものであった。他方また仏説にいうところの怪奇については人の精神によるものでこれを主観的存在として扱うのである。

仏説の鬼と申すも自業自得果と説き侍れば、迷へる罪障にひかれて見る所の名にて、聖賢君子の靈の成れる物にあらず。されば六道流転は心より発るによりて、心の鬼と申しならはせり。(巻二「鬼と云ふに様々の説ある事」)

地獄については「我ゆめゆめ仏道を誂るにあらず」と断わりながら「人の氣の前提る幻容なるべし」とこれを主観的存在として扱ふ。

仏家に説き置き給ひし地獄の事は是は愚人の奸悪をなして何とぞ上の刑罰を免れんとして恥づることなき者のために、少時設けて教へ立つるのみ。いかで人死して形つてさらに苦しみを受くることあらんや。

と、地獄は仏家の故意に設けたものであるにもかかわらず、世間ではいたすらにその存在を信じて売僧に誑れる愚人の多いことを戒めたりする。

或はしたしき親、馴れたる妻などの死して、物ごとなしき折がら、出家等のわたりて、そこへを通りしに、其の死人よりかたみを送り給ひしなどいひて、死人に著せやりたる著物の袖襷などを持ち来る事多し。是れ皆手だて有る事のやうに覺え侍る。何れもさしもの學者達なれば、大方は推察し給ふべし。

死者がその家に言伝てを依頼する話は、たとえば『御伽物語』の「けんじん寺のつけを売る事」(巻四)にあった。そしてそれを懷疑的に扱ったものに餅屋『新御伽婢子』(天和三年刊)の「沈香合」(巻五)があったが、その後の『御伽比丘尼』(貞享五年刊)の「虚の皮破る姿の僧」(巻四)はこの売僧の物語であり、『怪談弁妄録』(寛政十二年刊)の「一奸猾欺豪商」(巻二)や、『古今夷物語』(宝暦十二年刊)の「幽霊片袖を古郷へ送る」(巻一)などいずれも怪談の辨惑物が好んで用いる題材となっているもので、その意味で『百物語評判』は『選撰古書解題』のいう辨惑物の先蹤ということも出来るかも知れない。

五

だが、この一見して合理的と思われる『百物語評判』の態度がきわめて曖昧なものであったことは、「すべて怪しき事は遠国にある物なり」(巻一「絶岸和尚肥後にて轆轤首見給ひし事」)と怪異の遠隔地存在論や「此方の一心さへ正しければ禍にあふべからず」(巻二「狸の事」)と人間の精神面を問題としていことである。鎌鼬を「都方の人または名字ある侍に此疵あうたる者なきは邪氣の正氣に勝たざる理なるべし」(巻一「越後新瀉に鎌鼬有し事」といひ、鬼については「夜叉羅刹鬼などといふはは、天竺の国の名にして、其の地中国を去る事遠ければ、人倫を離れて恐ろしき色々の形あり」(巻一「鬼と云ふに様々の説ある事」)。また大神は「此の大神王城の人に憑く事あらず」(巻一「大神四國にある事」)。狐については「ばぐるは狐の術、ばかされぬは哲人の徳……されば本心の正しき人は千歳の狐も誑すことなし」といひ、狸についてもまた同様で「ただ此方の

一心さへ正しければ禍にあふべからず。博学の学者は、其の博学故内明なり……皆内に守りあれば妖怪の者も害を為すこと能はざるなるべし」と説くのである。要するに

孔子の説には怪力乱神は元よりあらざる所なれば箇様の類に似たる沙汰も候はねど、ただ人道を治むれば其の怪しき事もおのづから消え失するにこそ侍れ。

(巻三「天狗の沙汰付浅間獄求聞持の事」)

という記述を見るに及んで『百物語評判』の評判を離れた教訓性を思わせるのであるが、それは仮名草子の怪異小説の啓蒙精神が教訓性と不可分のものであったことの好例であり、そこでは教訓なくして啓蒙もあり得なかつたのである。

とすると元隣の怪異に対する曖昧な態度が果たして元隣その人の思想にもとづくものであったのか、あるいは巷間の風説を強ちに否定することなく、むしろ迎合しながらすすめる元隣一流の啓蒙精神によるものであったのかいまは明かにすることが出来ない。だが、『百物語評判』で示した怪異に対する理論が仮名草子の怪異理論の集約であったことは確かで、そのためにその後の怪談の理論的根拠となり得たのである。

(注1) 水谷不倒著『遺沢古書解題』の『怪談辨妄録』(寛政十二年刊)の解説。

寛文以降、怪談異聞の流行につれて、之が妄を辨じ、世人の惑を解かんと賦みた書が若干ある。山岡元隣の『百物語評判』の如きがそれで、此種の書は、先づ怪談異聞を掲げ、理を解き出所をただし、信すべからざるを論じ、虚誕を是正するに努めている。

(注2) 北条団水『一夜船』(正徳二年刊)など、『一夜船』と『百物語評判』の関係については

拙稿「怪談会から怪異小説へ」(『国語国文研究』三四号・昭和三十八年二月)参照。